

ほっとらいん
ふろむ
ほんこう

認知症ケアから看取りまでを考える、 パーソン・センタード・ケアを観る映画 『毎日がアルツハイマー』シリーズ

1980年代に、認知症をもつ人のケアのあり方として、イギリスの心理学者、故・トム・キッドウッド教授が提唱し広まった、パーソン・センタード・ケア。そのエッセンスに触れることのできる映画『毎日がアルツハイマー』についてご紹介します。

映画『毎日がアルツハイマー』とは？

映画監督の関口祐加さんは、自分の母親に認知症の症状が始めてからの日々を、ドキュメンタリー映画として発表し

てきました。その名も、『毎日がアルツハイマー』(略して『毎アル』)。

2012年に公開された1作目は、お母さんのひろこさんが、アルツハイマー型認知症と診断を受ける少し前の、2009年9月から始まります。その翌年、ひろこさんが家に閉じこもってしまったのを機に、関口監督は29年間のオーストラリアでの生活に区切りをつけて帰国。ひろこさんと同居し見守りながら、日常を撮り続けました。自分のことは二の次で、良妻賢母の鏡のようだったひろこさんが、本能のままに好きなことを言ったりしたりするようになった姿が魅力的に思えたのだそうです。

大人同士の母娘のほどよい距離感や、ユーモアのある絶妙なやりとり、娘が自分にカメラを向けていることをわかって拒まない、ひろこさんの優しさもありつつ切り取られたシーンの数々。それらは認知症を悲観しすぎず、「認知症があってもがんばっている」と美化するのではなく、あくまで「日常」です。物忘れが出てきたり、外に出たくなくなったりしながらも、1人の人として意志をもって毎日を過ごすひろこさんの姿が映

し出されています。

2014年には2作目が、さらに今年3作目の『毎日がアルツハイマー ザ・ファイナル』も公開されました。

パーソン・センタード・ケアと『毎アル』

ひろこさんとの暮らしのなかで、認知症をもつ人へのケアについて深く考えるようになった関口監督が、認知症ケアの実践者を訪ねる2作目、『毎日がアルツハイマー2——関口監督イギリスへ行く編』。そこで紹介されたのが、パーソン・センタード・ケアでした。

パーソン・センタード・ケアは、認知症をもつ人を1人の人として尊重し、その人の視点や立場に立つて理解し、ケアを行なおうとする考え方です。認知症をもつ人々の行動や状態は、認知症の原因疾患のみに影響されるのではなく、性格や生活歴、健康状態、その人を囲む環境や人間関係などの要因との相互作用であると捉えます。トム・キッドウッド教授が1980年代に提唱したこの考え方は、英国の高齢者サービスの国家基準にも取り入れられています。



『毎日がアルツハイマー ザ・ファイナル——最期に死ぬ時。』の公開を記念して行なわれた〈ヒューゴ・デ・ワール博士来日 記念イベント——「認知症の人を尊重するケア」その本質とは?〉の様子。向かって左が関口監督で、右から2人目がデ・ワール博士。

長編映画 毎日がアルツハイマー



東京・ポレポレ東中野での『毎日アルツハイマー ザ・ファイナル——最期に死ぬ時。』公開期間中には、ゲストと「最期の時」を考えるトークイベントが開催されました。本誌の連載でもおなじみ、秋山正子さんも登場しました。

パーソン・フードという考え方

3作目は、そのタイトルの示すように、関口監督が、人生の締めくくりについてさまざまな視点から考えた作品となっています。

そんなこともあり、トークイベントでは、ケアというよりも、パーソン・センタード・ケアの根底にある「パーソン・フード」という考え方が、よく語られていました。パーソン・フードとは、誰もが1人の人として周囲に受け入れられ、尊重されるような立ち位置を示す言葉です。ひとつ、関口監督が語ったエピソードを紹介します。映画に出演してもらったある女性に、撮影後に会いに行つたとこ

関口監督は、イギリス国立認知症ケア・アカデミー「ハマートンコート」の施設長、ヒューゴ・デ・ウァール博士にインタビューをし、「認知症になっても十人十色」「安易に薬に頼らない」「探偵になつて理由を探る」といった、パーソン・センタード・ケアに基づく言葉の数々を受け取り、ひろこさんとの関わり方のヒントと勇気を得て帰ってきます。

今年7月には、第3作『毎日アルツハイマー ザ・ファイナル——最期に死ぬ時。』の公開を機に、パーソン・センタード・ケアを中心に認知症ケアのあり方について、関口監督とデ・ウァール博士が話し合うトークイベントも東京・日比谷で開催されました。

ろ、その方は認知症の進行があり施設に入つていて、呼びかけに対して反応が難しい状態でした。関口監督がそんな彼女の手を握り「私の映画に出てくれてありがとう」と言うと、女性は涙を流したそうです。「魂がつながった気がした」「認知症ケアつてそういうことなんだ、まさにパーソン・フード。その人というものを常に感じていなければいけないんだ」と思った」と、涙声で振り返る関口監督。

デ・ウァール博士は、関口監督とその女性がコミュニケーションをとれたのは、「つながり方、入り口を知っていたから」とコメントします。その入り口は、人によつてもタイミングによつても変わっていくもの、とも言います。「つらさもあるけれど、探偵になつたように、その入り口を探していく楽しさがある」と、関口監督。

パーソン・センタード・ケアは、テキストを読んだらできるというのではなく、「感じてもらわなければならない」と話すデ・ウァール博士は、ハマートンコートで、援助者向けにトレーニングを行なっています。これが日本でも、認知症を持つ人の家族にも広まってほしいと関口監督は願っています。

*

3作目は、一部の劇場ではありますが、10月11日も公開中です。過去の2作品はDVDになっています。現在認知症をもつ人との関わりに悩む人はもちろん、

パーソン・センタード・ケアを知っている人も、もう一度、原点をふり返つてみるにはよさそうです。愛のあるユーモアにも導かれ、パーソン・フードな世界に引き込まれることでしょう。

(文・写真 神保康子)



上映情報

『毎日アルツハイマー ザ・ファイナル』
10/20(土)~11/2(金)
東京・ポレポレ東中野にて再上映決定!
ほか、大阪・第七藝術劇場、広島・横川シネマ
など全国順次公開中
<http://maiaru.com/>
配給:リカード